

学級経営(1)

福代 昭二

1 はじめに

学級は、学校教育を行うために組織された最も基本的な児童・生徒の集団の単位である。明治時代の近代学校の成立とともに学級が編成され、以後、学年別学級編成の多級学校が学校の基本形態として現在に至ったのである。その学級は、本来、学習指導の単位集団として編成されたが、しだいに生活集団としての活動を通して生徒指導を行うための単位集団として考えられるようになった。また、児童・生徒は、学級集団における学習・生活の経験を通して民主的な社会の成員としての資質を学ぶとともに、個性を伸長し、自己実現のための態度を身につけることが期待されている。

現在、学校教育をめぐる、教育改革、教育課程の改訂、学校改善等の要請も高まり、その施策も軌道に乗ってきている。しかし、各学校における平素の教育活動そのものが改善されなければ、遠大な教育改善の理念も画餅に帰すといえることができる。学校教育を推進する上で教科指導と生活指導が機能する場合は、学校の教育単位の集団としての学級である。したがって、教育改善の成否を左右するものは、学級における教育いかんによるといっても過言ではないであろう。

児童・生徒は、学校生活の大部分を学級の中で過ごし、教師の指導のもとに学習し、知識、技能、人格を学びとる。そののみか、学級集団の中で級友との人間関係を通じて、知的、

情緒的、社会的に成長する。もちろんその逆の場合もある。

このような意味を踏まえて、われわれは先に、「学級集団と人間関係(1)」において、学級集団の発生、成立の条件、学級編制の推移、学級における人間関係を考察した。⁽¹⁾続いて「学級集団と人間関係(2)」で、学級集団の特質と機能、人的条件、成員の相互作用、級風を考察した。⁽²⁾さらに「学級集団と人間関係(3)」で、学級集団の形成と指導的意義、リーダー、教師の指導性、学級集団としての学級を考察した。⁽³⁾本稿では、以上の考察を基盤としながら、わが国の近代教育の推移において、時代的意義を画したと考えられる先達の学級経営の理論や実践を明らかにして、今後、学校教育の充実・徹底の課題にこたえる学級経営の究明に資したく考える。

2 学級経営の開幕

わが国における学校教育の近代化の過程においては、いわゆる学級経営の理論的研究やその実践はあまり活発ではなかった。その理由について、一般的には単級学校(1教室1教師の学校)が高く評価され、多級学校(多くの学級をもっている学校)は、多人数の教師が参画するため、教育の統一に欠けるものとして問題視されることもあったであろう。しかし、時代の進展、就学率の増加等の傾向は、多級学校の中に理想の学校を求めるようになったのである。⁽⁴⁾

つまり、明治以前に見られた寺子屋や私塾

等の教育では、一教師の知識・技能や人格を慕って、異年齢の児童が集い来る。この児童に対し家族的人間関係をもって訓育的效果をあげ、自学養成することが一般的であったと考えられる。この思想は、近代学校の発生、多級学校の出現によっても衰退せず、却って学級経営の中に引継がれ影響を与えているのである。

(1) 学校教育の基礎としての学級経営

——沢正「学級経営」

わが国の学級経営研究史の上で、歴史的な著作となっている「学級経営」(沢正著)が刊行されたのは明治45(1912)年である。これは、沢正氏が、富山県師範学校附属小学校主事のとき、学校における実践研究を基盤にまとめた著作であって諸外国からの影響を受けた形跡は見当たらない。当時、学級経営に関心が高まった教育界の事情を次のように推測することができる。明治40(1907)年に義務教育年限が6か年に延長され、その結果、児童数の増加や学級数の増大があった。こうして多級編成の学校が出現することとなり、それぞれの学級担任の教師は、他学級との対比において学級意識を強く持つようになったのではなかろうか。

学級経営の「温故知新」の意味から、沢正氏の「学級経営」⁽⁵⁾を熟読してみたい。「自序」に、「学校教育の基礎は学級の経営にあり。学級経営に対する努力を問はずして、学校を経営せんとする人はかつて教育を充実せしめ得ざるべし。今は徒らに外形の観を教育の上に設くべき時期にあらず。念々部分を完成して全校教育を充実せしむべき途上にあり。すなはち言ふ、学級経営に対して専ら力をいたすは刻下教育の急要事とすべき所なり」(P. 1) また、「緒言」に、「学級経営は部分完成の業である。部分成らずして徒らに全体を組成せんとするものは、常に虚影を構成するの

である。堅実にして基礎ある教育は、学級経営を外にして望むことは出来ない。実に、学級経営は学校の内容を充実せしむべき最要の基礎である。」(PP. 4～5)とある。ここから、沢正氏の学級経営に関する基本的な思想は、学級経営を学校教育の基礎にするという点にあったことを十分うかがうことができる。

さらに「序論」で学級経営の意義について、「学級経営の意義を包括的にここにいへば、学級の教育を適良ならしめ、意義あらしめ、効果あらしむるの方案とこれが実行とである。」(P. 9)とし、「学級の教育を適良ならしめ意義あらしめ効果あらしむるといふことの内容については少し進んでこれを明にしなければならぬ。」(P. 9)として「小学校を範囲としての説」と断わって次の5項目を挙げ、項目ごとに詳しく説明を加えている。即ち、「①学校教育の趣旨に添ふべきこと ②児童学力の進歩を図るべきこと ③級風の善良を期すべきこと ④個性の發揮につとむべきこと ⑤施設を徒らに多くせんよりも効果を確實ならしむることに力むべきこと。」(PP. 9～13)

また、「学級経営と学級担任」について、次の4項目を挙げ、項目ごとに詳述している。即ち、「①学級担任は経営の主体である(直接の責任者) ②親の情を似てすべきこと(精神的経営、家族的感情) ③個性を知悉すべきこと(個性發揮の予件、個性観察簿) ④学校経営の全系統と調和すべきこと(学級経営と体系上の位置、人格中心、調和と特色)」(PP. 18～28) [() 内の語句は①～④の説明に当たっての欄外抽出語句である)

ここに取り上げたものを見ても「児童の学力、級風の善良、個性の發揮、経営の主体」等、現在における学校教育の課題と相通ずるものが少なくない。これらの用語は、現在の教育用語と、その言いまわしは必ずしも一致

していないと考えられる。しかし、学級経営を学校の「基礎経営」であると明確に位置づけ、学級の独自性を生かし、主体性を保ちつつ経営することを主張した点が特色をなしている。この考え方は次の文からも読み取ることができる。「学級は担任者の人格を中心として、精神ある特質を具ふべきものたることは、前に論じた通りであるが、その独立経営の意義は比較的相対的のものであって学校経営の各部に対する系統体系の間に介してよく調和的位置をしめなければならない。……学校の部分経営たる学級の経営をその全体系に於ける適當の位置に置くことがここに所謂系統法的経営である。系統法的経営は他の部分要素と調和し従って全体と調和を保つものである。」(PP.298~299)

「学級経営の円満なる極致は全く家族制の経営に到達することである。……学級を担任するものはまさに親の情をもって級児童に対すべきことは前章既にこれを述べて置いた。学級の家族制による経営はここより始まる。一学級は一家に比ぶべく、学校はまさにこれ等の集まってなった宗家と見なすべきである。一家和風渡らば宗家また幸なるべき道理である。」(PP.299~300)

以上の引用からも分かるように、沢正氏は、全巻を通じて、学級経営の在り方を、学校経営の方針を実現する方向に求めているのである。即ち、学級経営は独自性、主体性を發揮して運営すべきであるが独走してはならないという調和的な考え方が基底に流れているといえるのである。

3 「学級王国」という考え方の学級経営

大正時代の教育は自由主義教育が支配的であった。いわゆる大正デモクラシーを反映して、明治後期の新教育傾向が一層成熟するとともに、新たな教育上の思想や実践も導入さ

れ、多彩な提唱や運動が展開された。

沢正氏の学級経営論に見られる、児童の個性の發揮、学級の主体性の重視、教師の人格の尊重、学校経営と学級経営の調和等の考え方は、大正デモクラシーの第一次新教育運動の実践家たちの中で、より明確化、具現化され、同時に理論づけられていったように考えられる。

大正中期は、新教育思想として、児童中心、自由主義、活動主義、全人的発達などを重視し、強いロマンチズムに貫かれていることは共通していた。中でも、学級経営を考察する上で注目したいのは、この時期に「学級王国」という考え方が誕生してきたことである。ここでは、東から手塚岸衛氏、西から清水甚吾氏の業績を中心に考察してみよう。

(1) 自由教育主義に基づく学級経営

——手塚岸衛「自由教育真義」

大正11(1922)年に手塚岸衛氏(千葉師範学校附属小学校主事)は、「自由教育真義」⁽⁶⁾を著わし「学級王国論」の見解を明示している。彼の考え方は、標題のように自由教育主義である。例えば、「自序」において、「教育上適切緊要ならざる因襲的な施設と事務とを淘汰し駆逐せんがために」(P.8)①1学期間、学校内規の無視を申し合わせた②掲示板を児童の発表板とした③教師中心の朝礼を児童本位の自治集会と改めた④級訓を除き、学級精神を掲げた⑤教授と訓練に、自学と自治を加えて陣容を整えた。こうして「当校在来の面目はほとんど一洗された。」(P.9)とある。

また「教育上の画一的平等の弊を打破し、教権中心の教師本位を排し、自由学習の児童本位」を高唱して、「知識技芸に対する自学自習、道徳訓練に対する自律自治、身体養護に対する自強自育と、飽くまで自己が自己を教育せんとする児童の自覚、即ち自由なる自

己実現を本体として、教師はただこれが刺激と暗示と批判とに当るを最高任務となす。」(P.220)と述べている。

このような教育主張を基盤とする彼の学級経営方針は、「学級は男女別、児童数は40人とし、教科担任制を加味し、持上り主義を本則とし経営は学級本位にして之が責任は担任訓導に在り。訓導とは一学級教育担当の能力者なるを似て濫りに他の干渉を許さず。吾等に『学級王国』の標語あり。」(P.229)と道破している。彼は「学級王国」的学級経営を進めるに当たって、次のような斬新な方法を講じている。①自由学習時と自由学習日の設置 ②自学室、児童図書館、学級文庫の設置 ③自由講座と自由聴講 ④児童用の学習板 ⑤教師本位の掲示板を児童中心の発表板とする ⑥自治集会 ⑦自治集会を開き、相談、忠告、談話、朗読、唱歌、黙想、成績品発表等を行う ⑧学級自治会の実施 ⑨児童による掃除全廃と人夫雇傭 ⑩洋服着用の奨励 ⑪学校開放などである。

これらは、画一主義的時流の教育に抗する革新的、徹底的な学級主体の経営であるが、激しい社会的非難を浴びて間もなく失脚した。しかし、現在の教育実践において、児童・生徒の主体性、個性、自己教育力等が重視され、また、学年・学級経営を追究する上に多くの示唆を与えていることは見失ってはならない。

(2) 全的發展をめざす学級経営——清水甚吾「学習法実施と各学年の学級経営」

大正デモクラシーの第一次新教育運動の真只中であって、「学級王国論」を主唱したもう一人の巨峰に清水甚吾氏(奈良女子高等師範学校附属小学校訓導)がある。清水氏は、大正14(1925)年に「学習法実施と各学年の学級経営」⁽⁷⁾という本を公刊した。彼は「学級経営の根本条件」として、①学校の空気

②学校長の学校経営 ③学級経営者の児童に対する愛と熱を挙げているが、特に①②に注目してみよう。

「①学校の空気——学級経営の当面の仕事は一つの学級の成績をあげるといふ事であるが、孤立的に出来るものではない。学校全体の空気と有機的の関係をもつものである。……それには職員の自覚と協同一致と言う事が何より必要である。……人の和といっても消極的な『御無理御尤も』では進歩がない。違った意見のある事はよいが保守的破壊的でなく進歩的建設的でなければならぬ。かくて融和の中に清新で潑瀾たる生々した所が欲しい。」(PP.27~28)

「②学校長の学校経営——ア 学校長の主義方針 学校長は一定の主義方針を持っていて、その主義方針は職員児童に徹底させなければならぬ。……自己の理想とはいふものの、専制の考えでは良くないから、職員の意見をも集めて輿論を尊重することが大切である。即ち自治的立憲的でなければならぬ。……イ 統一と職員の長所の發揮 学校長は学校全体の統一を図って行かねばならぬ。統一はよいけれ共余り専制主義で干渉するのはよくない。また余り無干渉もよくない。要は大綱を捉へて細部分は各職員を信頼し大いに個性的の色彩を發揮させるがよい。細部分まで干渉して訓導の人格を認めない事になると訓導は受動的になる。……誰人にも長所が有る。各職員の長所を認め所謂「適材適所主義」で各職員を生かす様にする事が校長として最も大切な処である。」(PP.30~31)

清水氏の学級経営についての考え方は、学校経営全体を見通し、融和的、進歩的、建設的であること、学校長は学校経営全般にリーダーシップを發揮すべきであるが、専制的でなく、職員の意見を尊重すべきことを強調しているあたりは、沢正氏の調和思想との関連もうかがわれて興味深いものがある。

また、清水氏は、学級経営の責任当事者はその学級の成員全体であるとして全員の連帯責任を主張している。したがって学級に級長を作らず、どの児童にも時に応じて仕事を分担、処理させ、各自の児童が自分にも出来るのだという自尊心を持ち人格が認められる。それとともに、各児童が学級を愛し協同一致して学級をよくしようという念を抱く、彼らのこの自治心と責任感によって学級の進歩を図りたいとしている。

こうして、清水氏は、学級経営の理想を学級王国の建設に置いている。即ち、「特色あり且全的優秀なる学級王国の建設」について次のように述べている。「如何に児童中心の学習法によって学級経営を進めようとしても教師の努力がなくては成績があがるものではない。困難に打勝つという耐久力、即ち努力の継続が必要である。……学級は何といっても学級の受持教員の個性によって色づけられるものである。これと児童と相和して学級の特色といふものが出来る。特色なき学級は平凡である。併しながら特色にのみ偏してはならない。そこに全般的に優秀なる学級でなければならぬ。ここに特色あり且全的優秀なる学級王国が建設されるのである。……」(PP.221~222)

そして、彼は「学級王国の延長と人生の至楽」の章立てをして、概要、次のようにしめくくっている。「学級経営の当面の理想は学級王国の建設にある。学級王国が全的发展をするには、学級相互の連絡をとり、学校が一团となって発展しなければならぬ。即ち学級王国は学校王国に拡張され、学校全体が有機的統一的に発展しなければならぬ。この精神は学校の社会化となる。そして学校が社会文化の中心となり先覚となって行くものである。かうして個人が伸びると共に、社会国家が発達隆盛に赴くことになる。これが私が平素からいっている学校教育の空間的拡張であ

る。

学級王国は空間的拡張と共に時間的延長を似て発展しなければならぬ。私は学校を卒業して行った児童との間に、長く精神交通をしたいと思っている。学級経営の精神は児童の一生を支配して行くものである。社会国家に有為の人材を出すのも学級からである。……こんな学級王国の延長を図り、これを見ることは経営者としては極めて楽しいことで、人生の至楽である。」(PP.421~422)

4 戦後の教育の推移と学級経営

わが国は、昭和20年8月に終戦を迎え、昭和27年4月の独立回復までの数年間は、国政のすべては連合軍最高司令部の支配下におかれた。連合軍最高司令部は、わが国の軍国主義的・超国家主義的な思想及び教育の排除をねらって、「日本教育制度の管理」に関する指令(昭和20年10月22日)を出し、引続いて年末までに4つの指令を出した。

昭和21年3月来日の第一次米国教育使節団報告書は、新しい教育制度を構想する上で指導的な役割を果たした。続いて昭和22年に教育基本法、学校教育法の制定、昭和23年に教育委員会法の制定等、民主主義教育制度建設のための教育施策がとられた。

敗戦による国民生活の困窮と混乱、特に虚脱状態から立ち上った教育界は、デューイ(Dewey, J.)の経験主義を中心とする米国教育の吸収を始めた。まず最初の問題は、児童研究(昭和22年)、次いで地域社会学校とカリキュラム研究(昭和23年)や単元学習等であった。またこの年米国のガイダンス(guidance)理論による生活指導の提唱、即ち、教師養成研究会編「指導」が現われ、ガイダンス運動の口火を切った。昭和23年秋から、いわゆる「IFEL」(教育指導者講習)計画が実施され、米国の教育家たちによって、

日本の教育界の指導的地位に立つべき人々への指導と助言が行われた。こうしたことを背景として、昭和24年には、いわゆる教職員の再教育計画が前面的に実施された。

(1) 新教育制度の普及と学級経営

戦後の民主主義の新教育制度に基づく一連の教育は、文部省主導によって推進された。この間における学級経営論について、いくつかの資料によって考察してみよう。文部省「教育心理」(昭和22年)⁽⁸⁾には「子供と学校」の中で「社会としての学級」を取り上げ次のように述べている。「学級は、同年次の児童が、指導者および相談相手としての教師を中心として構成されている共同社会である。……児童にとって、学級はほとんど学校を意味し、自分の学級に対して、隣の学級はほとんど隣家である。……学級の集団意識はだいたい次のような事情が因になって発現する。①学級が1つの名称によって呼ばれる一団として、共に学び共に遊ぶ。②ひとりの教師を、共に「自分たちの先生」としてすべてがこれを中心として営まれている。③そして他の学級と対比して賞揚され非難される。このような共同の生活から、学級としての習慣や態度が生ずる。それにしたがって各児童は行動し、これを意識し是認して遂に義務を感じ、これに誇りを持つようになる。ここにいたって、学級意識は確立されるのである。この意識を強固にする条件は種々あるであろう。学級担任の教師の指導精神が一貫していることはその第一条件である。……教師の人物・気質・特技・趣味などが、そのまま学級の空気を支配して、強く児童に影響を持つのもこの理によるのである。」(PP.103~105)

また、米国のガイダンス理論の導入による生活指導の提唱として前述した、教師養成研究会編「指導」(昭和23年)⁽⁹⁾は、「学級担任教師の指導機能」について次のように述べ

る。「これは学生生徒を終始受持つ人であるから、彼等の全生活を知悉し、その助言や援助の責任がある。①各生徒について、助力的に、親切に、その個人々々に関心をもつ。②学校生活、日常習慣におけるよき方向づけをする。③レポートや出席を記録すること。④学校における社会性、指導者性、人格性を発揮させること。⑤指導専門家や学科担任との協力」(P.89)

次に、新制中学校が発足して1年半を経過した時点で、文部省が中学校教育全般について、中学校経営の指針として明示した「新しい中学校の手引」(昭和24年)⁽¹⁰⁾によって考察してみよう。「教室運営」について次のように述べている。「教室及び学級の運営は教師及び生徒に民主的な処理法を体験するよい機会を提供する。全活動の計画・遂行及び評価において、出来るだけ協力的方法を採用しなければならない。秩序ある教室は、協力的計画とクラスの成員各自が自分の分の責任を負う事により、実現し得るものである。色々な生徒や委員会が、窓・諸資材・本・花・黒板・壁新聞その他の教室の諸部分の世話をする。集団計画により、最良の学習状態がクラス全体に作り出されるように、クラスにおける態度の基準を樹てるがよい。よい風紀と行儀を維持するために、グループ法をある程度まで用いることが出来る。一人の生徒、若しくは一グループの生徒が行状問題を起した場合には、その場をどう処理するかについてクラス協議を行ってもよい。この様に困難な問題も屢々民主的に処理することが出来る。この様に民主的に処理するということは、教師がその経過に全然関与しないということの意味しているのではない。教師は賢明な指導者若しくは助言者であり、そういう存在として適当に教室の協議及び運営に参加すべきである。しかしこれは、クラスの決定事項を一人で作り、実際に生徒がこれを守るよう強制す

る、独裁的な親方タイプの教師とは非常に相違している。最良の教師は生徒がしなければならぬからでなく、したいと思うから正しいことを行うというように導くものである。そうすれば、学校を離れた後も彼等はより一層正しい判断を行い、健全な生活をする事が出来る。」(P.112)

また同書は、学校が生徒をよい市民として育成するためには、どうしたらよいかという問題について、学校が市民育成の場として整えられなければならない、と結論を出し、「学級における市民的経験」について次のように述べている。特に、学級における教師の姿勢は、上記引例と共通している点に注目したい。「生徒は教室活動、例えば、研究したり行ったりすることの計画、実行、評価のあらゆる面において参加することができる。教師は、賢い相談役や指導者の任務を行うが、しかし、生徒が教室活動に出来るだけ参加する権利を奪うようなことはないのである。教師は、教室において民主的な統制が保たれるように心がける必要があり、定見を持っているべきではあるが、独裁的であってはならない。教師は、生徒があらゆる機会を選び、教室の事務に一つの積極的な活動をするようにさせなくてはならない。教師は、生徒が団体の一員としての責任を引き受けるように、指導しなくてはならない。共に働き、共に生活する一つの方法としての協同は、対抗したり、競争したりするより、むしろ、これを強調するようにしなくてはならない。」(P.190)

次に、東京学芸大学、第一師範附属小学校著「小学校のガイダンス計画と実際」(昭和25年11月)⁽¹¹⁾を考察したい。「序」に、「新しい教育の根本的な課題の一つに教育の科学化ということがある。……教育の科学化の大きな問題は、教育の現場において最も切実であり重要であるところのガイダンスの客観化で

あり、科学化である。本校は当面の課題としてガイダンスの問題に、まっこうから、とりくんだのである。……その研究過程をまとめたのが本書である。」(PP.1～2)とある。

同書の「学級におけるガイダンス」を見ると次のように述べている。「学級ガイダンスは学校に生活するすべての実践経験について全面的に行われるもので、生活、即、ガイダンスということになる。したがってその任にあたるものは学級担任である。学級担任は学級の各個人をして学級の目指す具体的な目標に近づけるために、善をとり悪をしりぞけて、その個人にふさわしい力の芽を伸ばすように導くことである。学級ガイダンスと表裏の関係になるのが学校の教育目標であると共に、学年学級の教育目標である。教育目標を伴わないガイダンスは絶対にあり得ない。……学級経営は学級をして教育の目標に近づけるためには必要な経営をすることである。つまり健全なる身体をもち、立派な社会人としての精神・教養をもつ人間に育成するために必要な経営が学級の経営になる。学級経営の目指す具体的な目標を、精神、学習、健康の三部面から考察していくことも一案である。以上の三部面がより具体的な目標になった時、初めて適確な指導の実際が展開されると思われる。中学校や高等学校においてガイダンスの中核であるホームルームは小学校においては学級となり、その責任者は担任教師である。担任教師は児童のよき相談相手になり指導者になっていかなくてはならない。」(PP.297～299)

戦後の新教育の推移の中で、一里塚的な意味を占めたと考えられる著書に触れながら学級経営を考察してきた。これらの著書の一般的見解と見ることでできるのは、文部省編集「初等教育の原理」(昭和26年)⁽¹²⁾である。この書では、12の章立ての中の一つに「学級運営の効果をあげるにはどうしたらよいか」

の章を設け、さらに、「学校運営と学級運営の関係」「学級担任としての活動」「学級担任としてのその他の仕事」「複式学級および二部教授の場合の運営」の4節を設けて具体的に解説してある。その一部を引用してみよう。

「学校運営の方針と学級運営の方針との関係を考えるには、まず、学校と学級との関係を決定しておかなければならない。学校と学級との関係については、二つの考え方がある。すなわち学校に中心をおく考え方と、学級に中心をおく考え方である。前者の考え方が極端になれば、画一的になって学級の個性が失われてくる。また後者のように学校の構成の中心を学級において、これが極端になれば、従来の学級王国のようになる恐れがある。ところで、学級をみると、それは、個性をもった教師と、心身の発達段階を同じにしながら、同時に知能や性格の点で個性をもつ児童たちによって構成されている。そのために、それぞれの学級が個性をもつようになるのである。したがって、学校を運営するにあたっては、各学級の個性でじゅうぶんに生かすような方針が立てられなければならない。また、学級を運営するにあたっては、その学級の個性を生かしながら、同時に学校運営の方針に添うように留意していかなければならない。」

(P.15)

また、「学級担任としての活動」について、①日課表および指導案の作成 ②学級内におけるグループの編成 ③学習環境の構成 ④家庭との連絡 を挙げ、それぞれを詳述している。さらに、「学級担任としてのその他の仕事」として、①児童指導要録とその抄本の作成 ②出席簿の処理 ③身体検査の処理 ④家庭通信 ⑤学級経営案の作成 を追加している。

(2) 学校と有機的関連をもつ学級経営——

武田一郎「学校学級経営の基本問題」

第二次新教育の時代において、いち早く出された学級経営論として注目できるのは、昭和24(1949)年、武田一郎(文部省視学官)著「学校学級経営の基本問題」⁽¹³⁾である。とここでこの書物の基底には、学校有機体論とでもいふべき思想が読みとれて興味がある。⁽¹⁴⁾武田氏は、「まえがき」で述べているが、昭和22年の8月以来、文部省の視学官として、おもに小学校教育に関するしごとを担当し、特に文部省発行の「小学校経営の手引」と新学籍簿の作成委員の一人として参加したこと、及び2回にわたる教育長・指導主事の講習を担当したことを通じ、平素興味の中心としている学校や学級の経営に関して、基本的と思われる問題について、一応の結論に到達しているものを集めて整理したものである。

戦後、新しい教育を模索している時代や、著者の立場を考えた場合、この著書が昭和24・25年当時において啓発的な役割を果たし、また発火点として学級経営の研究と実践を推進させたということができる。

武田氏は、学校経営上、学級をいかに見るべきであるかについて、次のように述べている。「学級は、要するに、学校における児童生徒の学習の集団単位である。したがって、学校経営の方針や計画は、学級において具現されることが多い。それでは、学級は、学校の経営方針によって何等かの統制を受けねばならない。ここに統制とは、独裁的な圧制的強制を意味するものではない。……この統制ということは、けっして学級の個性を否定するものであってはいけな。統制とは、いわば精神的統制であって、形式的な画一化を意味するものではない。精神的統一とは、その学校の経営に関して、全職員児童生徒が共通の関心をもち、相協力して、これを実現しようとする心構えを意味する。だから、この共

通目標を、各学級においては、どのようにしたらよく実現されるか、それはとりもなおさず、その学級がもっともよく生きる道であり、それぞれ個性的な学級が学校全体として有機的関連のもとに、一つの統一をもって学校経営に現われてくるわけである。この統一と自由、一般と個性の両立は、真の民主的社会においてのみ可能であろう。学校は民主的な協同体でなければならない。学校こそ、民主社会の根本原理を、模式的に実現し得る社会でなければならない。」(PP.84~86) 彼は、後段で、学校の民主化というものは、学級の誤った自由主義によってわざわいされる。それゆえ、学級はその自由が認められ、個性が尊重されなければならないが、それは、あくまで開放的であり、他の自由な批判を許し、自らもそれによって反省し、不断に向上するようでなければならないと述べている。ここからも、学校経営と学級の関係、統一と自由、一般と個性の両立を目指し、学校の民主化にその調和を求めようとしていることが分かる。

また、武田氏は、学級をいかに編制するかということは、学校経営上重大な問題であることに着目し、「学級編制」について次のように述べている。「およそいかなる学校における学級の編制においても、この編制の基本原則となるものに三つのことが要請される。その1は民主化(Democratization)であり、その2は個別化(Individualization)であり、その3は社会化(Socialization)である。すなわち学級の編制においては、男女の平等とか人権の尊重とか機会均等といったような民主主義の基本原則に従うべきであり、また学級においては、ひとりびとりの児童生徒が、その能力に応じて、それぞれの最上の発展ができ、それぞれの個性の完成が図られるようでなければならない。そして三つめには、学級という集団において、児童生徒の社会性が

養われ、民主的社会の良き市民として、社会共同生活をなし得るような態度や技能がみがかれねばならない。この三原則は、およそ学級が編制されるに当たって、いかなる種類の学校においても、いかなる地方の学校においても、基本的に考慮されねばならぬかぎである。」(PP.87~88)

即ち、武田氏の学級経営観、学級教育観は児童・生徒を民主社会形成の主人公として育てる、そのため、児童・生徒の自主的活動が中心となり、その個性と社会性の発達を重視することで貫いているといえる。換言すれば、児童・生徒が民主社会を形成するよき市民として養育されるためには、学級担任の教師は自分の担当する学級について民主的な協力活動をなしうる豊富な機会を用意することを強調しているのである。

5 「学級づくり」と学級経営

第二次新教育における学級経営の研究と実践は、前述した武田一郎氏の所説によって総括され次第に深まりをみせた。そのピークは昭和26・27年頃と考えられている。当時は、戦後における6・3制教育が、矢継ぎ早に実施に移されていった。そのため、教育現場にはさまざまな矛盾が表出してきた。例えば、「すしづめ学級」という過大学級の問題や、これにかかわる児童・生徒の学力の問題、さらに、教員の労働負担の問題等があった。このような状況の中で、教師の過重労働と、これに伴う不完全な教育活動の実体を明らかにしようとした「教職活動調査—昭和29年度」(日本教職員組合調査部、昭和30年)、あるいは、「学級規模の学習効果に及ぼす影響に関する実験的研究」(九州大学教育学部、昭和33年)が公にされ注目を呼んだのである。

このような、学級に対する教育界の関心の高まりは、必然的に学級経営に関する実践的

理論的研究を促進させた。中でも、従来の学級経営とはスタイルを異にする「学級づくり」の台頭に注目しなければならない。この動きは、昭和25年頃より頭角を現わしてきた「生活つづりかた運動」と、この運動の中の「仲間づくり」が即「学級づくり」として研究・実践されたものであった。『「学級づくり」』は、児童の学級生活を中心に生活現実を直視し、その変革に学級集団として取り組み、その質的成長過程そのものを動的にとらえ教育的意義を求めようとする学級経営論である。⁽¹⁵⁾

「生活つづりかた運動」は、戦時中に中断されたものの大正時代に活発に展開された実績がある。それが第二次新教育の渦の中によりみがえり、学級の一人ひとりの児童・生徒の人間的な願いや真実の声を重視し掘り起こそうとする方法は、学級経営の考え方に新風を吹きこむこととなったということができよう。

数多く公にされている「生活つづりかた」「学級づくり」の実践・研究の中から、特に「山びこ学校」（無着成恭編）、「村を育てる学力」（東井義雄著）を取り上げて考察することとしたい。

(1) 子どもに現実の生活を考えさせる学級経営——無着成恭「山びこ学校」

まず最初に注目したいのは、山形県山元中学校生徒の生活記録、昭和26（1951）年刊、「山びこ学校」である。敗戦による廃墟の中から立ち上って数年、新しい教育理念を掲げてスタートした6・3制当初の作品である。施設・設備にも全く恵まれず、教具も乏しい東北地方の一中学校、ここの2年生の学級担任が新卒教師無着成恭氏である。物質的に恵まれていなくても、教師の指導いかん、学級経営いかんによっては、ものごとを深く考える生徒個人、また、みんなで共同で考え合う学級集団を育てることができることを世間に示した生徒作品集といえよう。

「山びこ学校」の「あとがき—子供と共に生活して—」において、編者無着成恭氏は、この綴方が誕生したことについて次のように述べている。⁽¹⁶⁾『どうしてこのような綴方が生れてきたかということです。それは、ほんものの教育をしたいという願いが動機だったと思います。例えば社会科4『日本のいなかの生活』の中に『村には普通には小学校と中学校がある。この9年間は義務教育であるから、村で学校を建てて、村に住む子供たちをりっぱに教育するための施設がととのえられている。』と書かれています。ところが、それをそっくりそのまま子供に教えたのではウソになるということに気がついたのです。つまり現実には、地図1枚もなく、理科の実験道具1かけらもなく、かやぶきの校舎で、教室は暗く、おまけに破れた障子から吹雪がびゅうびゅうはいて来る教室で、先生のチョーク1本をたよりに教育がいとまれているのであり、村当局はようやくおそいかり始めた金づまりのため、学校が教科書の条件をみたく何10分の1の資力もないのでした。……教科書どおり安易にやってきた私は全く不勉強きわまりない教師であったのです。しかし、そういうことがわかった私は、いつまでもそのまま続けているわけにはいきませんでした。そして、ずいぶん悩み、考えました。その結果、綴方を利用して見ようという気になったのでした。もちろん、それまでも綴方を書かせてきたのですが、綴方で勉強するために書かせたものではなく、ただ漫然と綴方を書かせてきたのでした。目的のない綴方指導から、現実の生活について討議し、考え、行動まで押し進めるための綴方指導へと移っていったのです。生活を勉強するための、ほんものの社会科をするための綴方を書くようになったのです。……私は社会科で求めているようなほんものの生活態度を発見させる一つの手がかりを綴方に求めたとい

うことです。だから、この本におさめられた綴方や詩は結果として書かれたものでなく、出発点として書かれたものです。一つ一つが問題を含み、一つ一つが教室の中で吟味されているのです。」(PP.271~273)

この著書から読み取れるように、十分に教材や教具等が整っていない学校にあっても、学級担任の教師の人間性や創意を生かした指導によっては、深く考える生徒の個人及び集団(学級)を育成することができた。それどころか、生徒の個人的な綴方であっても、生々しい生活環境を直視し、そこで考えぬいた生活探究の文章や詩を、クラスに投げかけて討議し、集団思考を通して豊かな学習を果らせていったのである。同時に、学級の連帯の絆を強め、学級集団の質を高めていったところに学級経営論の一つの輝きがあるといえよう。このことを、証明するかのように、3年佐藤藤三郎の「答辞」は次のように述べている。⁽¹⁷⁾「……私たちは、はっきりいいます。私たちは、この3年間、ほんものの勉強をさせてもらったのです。たとえ、試験の点数が悪かろうと、頭のまわり方が少々鈍かろうと、私たち43名は、ほんものの勉強をさせてもらったのです。それが証拠には、今では誰一人として、『勝手だべ。』などという人はいません。人のわる口をかげでこそそこそいったりする人はいません。ごまかして自分だけ得をしようなどという人はいません。私たちが中学校で習ったことは、人間の生命というものは、すばらしく大事なものだということでした。そしてそのすばらしく大事な生命も、生きて行く態度をまちがえば、さっぱりねうちのないものだということとなったのです。……」(P.258)

宮坂哲文氏は、著書「学級経営入門」において次のように述べている。⁽¹⁸⁾「伝統的な一斉教授や形式主義訓育が大手をふるって再登場したとき、それに対応して戦前からのすぐ

れた民主的教育遺産としてのもろもろの教育方法が、ふたたび注目をあびはじめたのである。こうして、教育の方法というものが、はじめて日本の歴史的社会的な現実の諸条件のなかで問われるようになってきたといえる。生活綴方的な手法による「なまづくり」「学級づくり」の実践の広がり、学級経営という古いことばに新鮮な魅力を盛った。……昭和26年に出版された無着成恭の『山びこ学校』は、こうした新しい変化をいわば象徴していたといえる。そこではことさら学級経営ということばは使われてはいないが、新しい期待を伴ってよみがえってきた学級経営の原型ともいべきものがそこに示されていたといえる。『山びこ学校』は社会科の指導記録であるとともに、生活指導の記録でもあった。そしてこのすぐれた実践記録が、社会科の記録でありながら、しかも単なる社会科の記録でなかったことが、この書物の価値を高くしたのである。」(PP.20~21)

(2) 子どもの生きがいを育む学級経営——東井義雄「村を育てる学力」

昭和26(1951)年の「山びこ学校」を契機として、新しい教育理念に基づく教育実践、学級経営の実践が続々と公開されるようになった。小西健二郎「学級革命」(牧書店)、土田茂範「村の一年生」(新評論)、東井義雄「村を育てる学力」(明治図書)等々がある。これらの実践記録は、昭和25年ころから昭和30年ごろに至る、思索し実践する教師たちの苦心の上に成ったものである。物質的には窮乏生活を続けながらも、心豊かな教育、将来に夢を継ぐ教育を行ったことを物語っている。

ここでは、特に、「村を育てる学力」⁽¹⁹⁾を取り上げて考察してみたい。「村を育てる学力」は、昭和30(1955)年ごろの「農村」の状況、特に村の貧窮とその封建性に心を痛め、

教育の力で改善しなければならぬと考えたところにこの書物の基盤がある。

村の親たちの学力観や村の子どもの学力の問題点に着目して、東井氏は次のように訴えている。「……進学指導・就職指導によって、たしかに村の子どもの学力は伸びるだろう。農村人口の都市へ移行も必然的な動向であろう。しかし、村の子どもが、村には見切りをつけて、都市の空に希望を描いて学ぶ、というのでは、あまりにみじめすぎる、と思うのだ。そういう学習も成り立つではあろうが、それによって育てられた学力は、出発点からして『村を捨てる学力』になってしまうのではないか。私は、子どもたちを、全部村にひきとめておくべきだなどと考えているのではない。……ただ私は、何とかして、学習の基盤に、この国土や社会に対する『愛』を据えつけておきたいと思うのだ。『村を捨てる学力』ではなく『村を育てる学力』が育てたいのだ。みじめな村をさえ見捨てず、愛し、育て得るような、主体性をもった学力なら、進学や就職だってのり越えるだろうし、たとえ失敗したところで、一生をだいなしにするような生き方はしないだろうし、村におれば村で、町におれば町で、その生きがいを発揮してくれるにちがいない、と思うのだ。」(PP.38~39) また、民主主義の時代とはいえ、村の人たちの意識は旧態依然たるものである点を直視し、教師の生き方を煩悶しつつも著者は次のように自問自答している。「村の人たちは、本能的に『民主主義』を憎悪しているように見える。親孝行を無視し、亭主を尻にしかせ、子どもに口答えをさせ、素直にいうことをきかないようにさせ、……しかも、『民主主義』の代弁者が、村では学校なのだ。溝は今も埋まてはいないのだ。これに対して、私たちはどう生きればいいのか。……そこで私は思う。私は一体だれの味方なのかと。そう自問する時、私には、なにかほんのりと道が見え

てくる気がする。私は『子ども』の味方なのだ。したがって、子どものかけがえのない味方である『親』とも味方なのだ。そして、子どもの育つ『村』とも味方なのだ。『村』や『親』は対立者ではなくて私の味方だったのだ。村の教師の生きる道は、ここからひらけてくる。——私はそう思う。それなのに、私たちは今まで、『子ども』や『村』よりも『近代化の精神』や『民主主義』を上位におきすぎたのではないか。そこに、『独善』や『追従』『妥協』『たたかい』等の誤謬が生まれる隙があったのではないか。……田んぼのまん中に建っている学校は、『子ども』や『村』の最もすぐれた味方でなければならない。そして、そのために『民主主義』や『近代精神』を背負うのでなければならない。——私はそう思う。」(PP.42~44)

教師が学校教育の意義を考え、同時に学級経営の在り方を模索するとき、真剣に考えれば考えるほど迷いも生じてくる。この答えの方向は、「学校」や「子供」のことを切り離して考えるだけではなく、「村」を「町」を、そして「日本」も同時に考えつつ、児童・生徒一人ひとりの「生きがい」を育むことに工夫を払わなければならない。それが学級経営の基本的な考え方のように思われる。著者は、この著書の「あとがき」で次のように述べている。『『村を育てる学力』この標題は、なお、誤解されやすい多くのものを含んでいる気がする。……しかし、『村を育てる学力』は『町を育てる学力』でもあり、『国を育てる学力』でもある。戦いに敗れ、いまもなお、さ迷っている。浮草のような生き方が、私たちのほんとうに生きる姿であってはならない。私たちは、私たちの生命のふるさとを、私たちの日ぐらしの中に、よびもどさねばならぬ。そして、子どもたちの日ぐらしの中にも、ふるさとを、育てねばならぬ。私は、村の子らを、もっともっと、かしこしてやりたい。子らが、

もっともっと、かしこくなってくれなければ、子らのしあわせも、村のしあわせも、成りたちはしない。でも、そのかしこさは、ふるさとのあるかしこさでなければならぬ。そういうかしこさをもった子なら、『村の土』『国の土』を豊かなものにしてくれるだろうし、生まれてきてよかった、といえるような、生きがいのある人生を築いてくれるにちがいない、と思うのだ。」(P.316)

6 おわりに

本稿では、わが国の学校教育の近代化の流れの中で、学級経営の考え方、学級の教育の推進において、一里塚の役割りを果たしたと考えられるユニークな実践者を選出して考察した。いずれの時代にあっても、学級担任の教師として、「自分の学級」をもつということは、一人前の教師となったことを意味するものであった。加えて、学級経営こそ、教師にとって、自己の人生観、教育観の燃焼、具現の機会や場であった。

現代にあっては、学級は、学習指導、生活指導の機能する学校における教育上の単位集団として認知されている。それゆえ、学級担任の教師の主体性、創造性を生かした学級経営に期待が寄せられている。しかし、わが国の学校教育の推移の中で、学級経営が認知される歩みは遅々としたものであり、幾多の障害がつきまとったことが推察される。むしろ、学級経営をめぐる考え方の歴史は、志ある教師たちの隘路打開の理論・実践の構築の歴史であったように考えられる。

特に、公立学校にあっては、国家・社会からの要請や統制等があり、これを受けての校長の学校経営の方針等がある。また、多様な価値観、教育観をもつ教師仲間との関係もある。このような外圧、内圧に屈することなく、眼前の児童・生徒に対する教育上の必要性を

前面に押し出して学級の教育を考えようとした教師によって学級経営の歴史の歯車はきざまれ、前進してきているとさえいえる。

本稿の学級経営の考察は、昭和30年代の半ばまでである。ここにおいて、学級経営という考え方に立つ流れと、学級づくりという考え方に立つ二つの系譜の存在のあることが分かった。さらに、昭和35年ごろから、集団主義学級づくり論も台頭することとなる。

学級経営というものをどのように考えるかは人によって異なっている。ここで、教育経営の視点に立つ学級運営の問題は、今後の研究課題として残したく考える。しかし、その仮説として、教育推進に当たって、全体的に調和化を図り、また、科学的に能率化を図り、さらに発達の適合化を図ることなどが要請されるといえよう。この意味から、学級経営の独走ではなく、学校教育の効果を高めることの一翼を担う学級経営という調和的な考え方を大事にしなければならないと考える。

注

- (1) 福代昭二「学級集団と人間関係(1)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第30集) 1986年 PP.11~24
- (2) 福代昭二「学級集団と人間関係(2)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第31集) 1987年 PP.96~106
- (3) 福代昭二「学級集団と人間関係(3)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第32集) 1988年 PP.61~72
- (4) 福代昭二「学級経営論の起こりとその理念」(木川・遠藤・福代編 小学校教育実践 講座15「学級 その人間化への努力」) ぎょうせい 1979年 P.7
- (5) 沢正「学級経営」弘道館 明治45(1912)年
- (6) 手塚岸衛「自由教育真義」宝文館 大正11(1922)年
- (7) 清水甚吾「学習法実施と各学年の学級経

- 営」 東洋図書 大正14 (1925) 年
- (8) 文部省「教育心理」 学芸図書 昭和22
(1947) 年7月 本書は連合軍最高司令部
民間情報教育部教育課のヘレン・ヘッファ
ナン女子のもとに井坂行男等10人の筆者に
よって書かれたものである〈奥付より〉
- (9) 教師養成研究会編(五十嵐・沢田)「指導」
師範学校教科書株式会社 1948年 P.89
- (10) 文部省学校教育局編「新しい中学校の手
引」 明治図書 1949年 P.112
- (11) 東京学芸大学・第一師範附属小学校編著
「小学校のガイダンス計画と実際」 目黒
書店 1950年 P.3 PP.297~299
- (12) 文部省「初等教育の原理」 東洋館出版
1951年 P.152 PP.84~86 PP.87~88
- (13) 武田一郎「学校学級経営の基本問題」
牧書店 1949年
- (14) 宮田丈夫「学級経営観の変遷」(雑誌・
教育じほう) 東京都新教育研究会 1964
年 12月号 P.8
- (15) 遠藤昭彦「学級経営論の変遷」(木川・
遠藤・福代編 小学校教育実践講座15 学
級 その人間化への努力) ぎょうせい
1979年 P.503
- (16) 無着成恭「山びこ学校」 青銅社 1951
年 PP.271~273
- (17) 佐藤藤三郎「答辞」 同書 P.258
- (18) 宮坂哲文「学級経営入門」 明治図書
1964年 PP.20~21
- (19) 東井義雄「村を育てる学力」 明治図書
1957年 PP.38~39 PP.42~44 P.36